

# 常光寺々報

2019/7

## お盆の文化講座

七月十四日(日)

昼一時半～四時

おつとめ 音楽法要(20分)

## 仏法対談

ゲスト 長生寺住職

常光寺住職

～超世の悲願聞きしより

われらは生死の凡夫かは

有漏の穢身は変わらねど

こころは浄土に遊ぶなり

## 旧盆法座

八月十三日(火)朝十時半～

「お盆の昔話」 当山住職

◎七月二十三日と八月三日の法座は休みになります。

## 今年のお盆

今年のお盆は、金沢区の六浦町にある長生寺のご住職にお願いして、二人で対談をさせてもらうことになりました。本堂での対談は初めてなので戸惑いもありますが、対談によって仏法をより分かりやすく伝えることができると思っています。

話の内容は、お盆のいわれや、お寺の縁起、仏法との出会い、他力の教え、親鸞聖人の人間観などを話し合えればいいなあと考えています。

## 情でつせ、お念仏でつせ

ああだった、こうだったと、昔のことを思い出しながら葬儀を家から出すことができたという。そして、それがなかなか良かったのだと、跡取りの利一さんがお寺へ来てしみじみと話されたというお話です。

「情緒がありましたなあ。セレモニーホールは段取りはええが、どうもひやつこい。お通夜も葬儀の時も、焼香したら送迎バスでさっさと帰ってしまう。残っているのは家のもんだけ。」

そやのうて通夜から葬式、出棺まで村の一人一人のあったかな涙に送られた父親は幸せやったと思いますわ。村でくらしした一人一人が、かわりあつた一つのいのちを送る。何十年と、喜びも悲しみも一緒にしたいのちを…。「ええとこ行きや」「わしもすぐあとから行くでえ。まっつてや」

そして、大きく、小さく、みんなの口からお念仏がこぼれる。お念仏に生きた仲間のいのちが、今、またお浄土の阿米ダ如来さまのもとへ帰る。そのいのちを見送る。ご院主さん、久しぶりにわたし、お葬式で涙が流れました。父親の葬式やからというのではなく、

あったかなあったかなお葬式に、心ふるえたんです。よろしいなあ、やっぱり昔ながらのお葬式は。

\* \* \* \* \*

それに比べ、最近はどうですか。死んだら土にもどるんやから散骨してほしいという人があったり、**直葬**とかいうて、死んだらなんにもせんとすぐ火葬場へ遺体を運んでしまおうとか…。

ご院主さん、時代がかわった、家の構造もちがう、とはいうものの、この間、となりの町の知り合いが亡くなったんで、悔みに行きましたらな、『**家族葬**なので』と言うて、追い返されたんですわ。くやみの一つぐらい、顔ぐらいちよつと拝ませてくれたらええのに、家族葬というのは家族以外の他人は排除するということですか。友達でっせ、若い頃、一緒に仕事した仲間でっせ。わたしは一言どなってやろう思いました

たが、まてまてと心をおさえました。せめてお葬式を見送ろうとしましたらな、『**けつこう**です』と追い返されました。

**通夜**のない**一日葬**というものもあるらしいです。家族が、ゆかりのある人が、亡くなった人の生きてきたその一つ一つをしのび、必ず終る生命のはかなさと、後生の一大事をしつかりお聞かせていただく大切な一夜、それが**通夜**と違いますか。葬式だけしといたらええんや、という若いもんの声もぼつぼつありますけどな、わたしは、どなりつけてやるんです。

『アホか、なに考えて生きとるんじや。お念仏しつかりといただけ』と。若いもんは、またじいさん、なにやら言うとるわ、で終わりですけどな。情がありません。情がないから、大切なもんが、一つ消えていくんですわ。情

がないんは、お念仏がなくなったからやと、ちよつと無茶かもしれませんけど、わたしはそう思うとります。

利一さんは、立ち去りぎわ、

「ご院主さん、なにごとも情でっせ。お念仏でっせ。あたたかな一つぶの涙でっせ、それさえ残つとつたら、まあ、何事についてもまちがいおませんやろ…、ほな、さいなら」  
中川真昭

『大乘』二十九年十一月

### 仏ごころ



看病をしながら居眠りをしていた時、ふと気が付くと、ずり落ちた自分の毛布を掛けなおしてくれる人がいる。誰かと思つたら、死の床にあった母がベットから身を乗り出してそうしてくれていたのだという。

こんな母の愛情を仏教では「**仏ごころ**」と言い、「**お慈悲**」といいます。